さいたま市岩槻区における神社建築

ー太田諏訪神社と長宮香取神社を中心に ー

Keywords
岩槻　都市形成史　城下町
長宮香取神社　太田諏訪神社　明戸天満宮

K09015　　海野 太郎

1. はじめに

1.1　研究背景・目的

さいたま市岩槻区(旧岩槻市)は、岩槻城が長禄元年(1457年)太田氏によって築城され、近世初頭に戦乱で荒れた街並みの復興に力が注がれ、城下町として発展を続けてきた。現在、岩槻城は城址公園として整備されているが、現存する遺構もあり、明戸天満宮も二の丸にあったとされている。

また、さいたま市から太田諏訪、長宮香取神社の調査依頼があり、本研究では、2007年に調査した明戸天満宮を加えた3神社において、実測調査を基にした木割やその建築の形式等を比較する。かつ、岩槻の都市形成史を明らかにし各神社の建立年を推察する。これにより、対象となる神社を、建築、都市史の両側面から分析し歴史的価値を見出す。

1.2　研究方法

(1) 太田諏訪、長宮香取、明戸天満宮における実測調査、ならびに文献調査
(2) 岩槻の古地図より都市形成の過程を分析し、それに関連する神社と照らし合わせる。
(3) (1)(2)より、対象神社の歴史的価値を明らかにする。

2. 調査

2.1　実測調査

2012年07月26日　太田諏訪神社　本殿
　　長宮香取神社　本殿
2007年07月26日　明戸天満宮　本殿

写真1　太田諏訪神社　　写真2　太田諏訪神社

写真3　長宮香取神社　　写真4　明戸天満宮

2.2　敷地

今回実測調査を行った3神社それぞれの所在地を図1に示す。現在、岩槻城址公園となっている場所が、岩槻城跡である。また、明戸天満宮については、現在は、太田にあるが、もとは岩槻城内の二の丸にあったとされており、移転を重ねている。太田諏訪神社についても移転が考えられる。

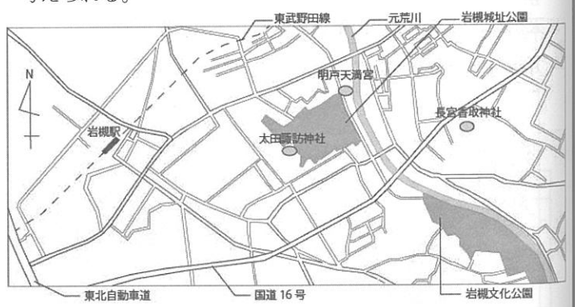


図1　神社所在地

3. 岩槻における都市形成

岩槻城は、長禄元年(1457)太田市によって築城された。岩槻が城下町としての形態を整え始めたのは、近世初頭の城主高力清長により戦乱で荒れた街並みの復興に力を注ぎ始めてからである。その後阿部氏に引き継がれ、城下九町が完成した。また、江戸の将軍が日光東照宮に参拝に向かう「日光御成道」での宿場町としても重要な役割を担っていた。将軍の宿には本丸御殿が利用された。本丸御殿は多くの場合、城主の居館とされるが、岩槻城の城主は三の丸に住居を設けた。

表1　岩槻年表

西暦	元号	出来事
1457	長禄元年	対古河公方の戦略拠点として、太田道真、太田道灌父子により岩槻城は築城されたとされている。
1467	応仁元年	応仁の乱が起こる
1471	文明3年	太田資忠が岩槻城主となる
1474	文明6年	渋江鋳物師泰次によってつくられた鰐口が孫九郎家吉によって長宮の香取宮に奉納される
1567	永禄10年	後北条氏による直接支配の始まり
1573～1581	天正元年～8年	北条氏政による岩槻城の改修。土塁(大溝)の構築
1585～1589	天正12～16年	豊臣秀吉との戦いに備えて修復、拡大し、防衛強化
1590	天正18年	豊臣秀吉の攻防により落城。 徳川家康の重臣である高力清長が2万石で入城し初代岩槻藩主となる。
1600	慶長5年	徳川家康が会津征伐の折、岩槻浄安寺に一泊する
1601	慶長6年	徳川家康が岩槻に放鷹する
1608	慶長13年	岩槻城主高力河内守清長が卒し、その孫左近大夫忠房が城主となる
1609	慶長14年	高力左近大夫忠長が、岩槻城内明戸神社に武運長久、子孫繁栄を祈願 岩槻城ことごとく焼る
1609	慶長14年	徳川家康は、岩槻のあたりを鷹狩し、岩槻城に立ち寄る。 城主忠房は御座所を、夜を日についでつくり出し諸例をおこなう。
1612	慶長17年	徳川家康は鷹狩を行い、岩槻城に宿る。高力忠房の母がまみえ奉る。 その子左近房長も初見し奉る。
1613	慶長18年	岩槻付近の土民が代官の非違を徳川家康に訴える。
1619	元和5年	将軍徳川秀忠は、日光社参の折、岩槻城に泊る。
1622	元和8年	徳川秀忠は家康7年忌に際し、日光社参の途次、岩槻城に泊る。
1624	寛永元年	三河譜代の家臣である阿部氏が相模小田原より5万5千石で入封。 阿部氏は5代続き1681年まで岩槻を治める
1634	寛永11年	徳川家光が、日光社参の折、岩槻城に泊る。
1636	寛永13年	
1638	寛永15年	阿部重次は、二の丸にて家光に御茶を献じる。 阿部重次は宿老となり、岩槻城主となり5万5千石を領す。番頭もかねる。
1640	寛永17年	徳川家光が、日光社参の折、岩槻城に泊る。
1642	寛永19年	
1600年代前半	慶長～慶安	太田諏訪神社が造営されたと推定。
1600年代半ば		17世紀前半に明戸天満宮が造営されたと推定。
1693	元禄6年	岩槻城三の丸の屋形の地祭りが行われる
1756	宝暦6年	明治4年まで大岡氏が8代にわたり岩槻藩をおさめた

4. 各神社概要

4.1　太田諏訪神社概要

所在地: さいたま市岩槻区太田1-10-59

『武州岩槻城絵図』に「諏訪宮」として記載されている神社である。現在地、すなわち城の南、堀の外に位置し、正福寺(現:岩槻商業高等学校)と浄源寺の間にある。この付近は江戸時代、岩槻城の武家地内の「諏訪小路」とよばれる一画にあたり、街路、街区名の諏訪小路は当社に因むと考えられる。

一間社流造、屋根は切妻造で栩葺。組物は出三ツ斗、中備は蟇股、懸魚は猪目懸魚である。絵様、海老虹梁、垂木、長押、斗、面幅など古い様相を蓄えている。明戸天満宮より古いと考えられるが、やや意匠を異にしている。

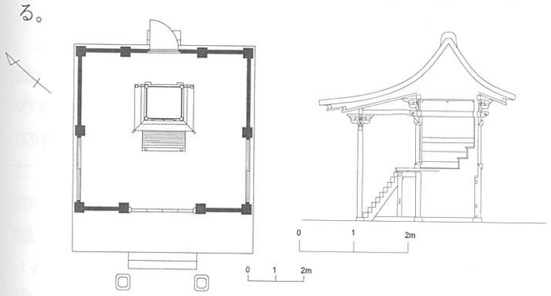


図2　太田諏訪神社　平面図・断面図

4.2　長宮香取神社

所在地: 埼玉県さいたま市岩槻区長宮 724

門の南西側、大光寺境外にあり、文明六年(1474)銘の鰐口はさいたま市指定有形文化財で渋江鋳物師の作。現在は鹿島社と合祀されており、相殿造である。

本殿は、二間社流造、屋根は切妻造で桟瓦葺。組物は木鼻付平三ツ斗で、四隅は連三ツ斗である。中備は間斗束である。懸魚は蕪懸魚。桁行方向実肘木には、絵様繰型がある。梁行方向の場合は、通し肘木は先端を切る。中通りには実肘木は配さない。肘木は面取りがなされている。絵様は浅い彫りの渦巻きである。

長宮香取の合祀とされているが、既往研究では鰐口にあるように香取社として発展してきた神社に鹿島社が合祀されたと考えられる。

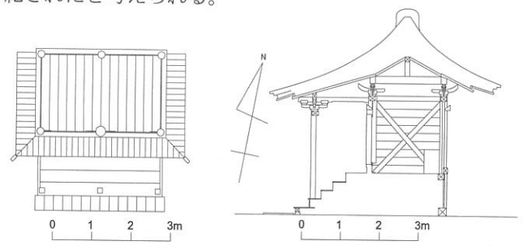


図3　長宮香取神社　平面図・断面図

4.3　明戸天満宮

所在地: 埼玉県さいたま市岩槻区太田２丁目

遷喬館の敷地内にあったりと、移転を重ねた。もとは、岩槻城内二の丸にあった天神社とされている。現在は、岩槻城址公園の北東にある。

一間社流造、銅板葺(現状)こけら葺。組物は連三ツ斗、中備は蟇股、水引虹梁は、渦は有るが若葉はない。背面には渦がなく袖切は明確である。これは極めて室町的であるといえる。妻面の虹梁は、渦、若葉の両方が見られる。

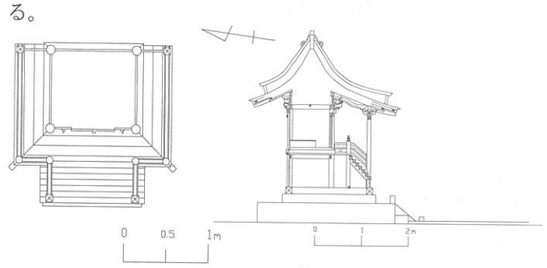


図4　明戸天満宮　平面図・断面図

5. 絵様による比較

各神社の絵様を比較する。絵様については、表2に示すように、建立年代の判定においても大きな手がかりとなる。実測データにより比較を行っていくが、蟇股や懸魚などは後から取り付けることが容易であり建立年代の判定においては信憑性に欠く。そのため、木鼻と虹梁を中心に建立年代の判定、及び比較、考察を行っていく。

表2　埼玉県における絵様の変遷

「関東地方の近世社寺建築〈2〉」より

	例	虹梁 備考	木鼻 備考
16世紀 (天正以前)	 法養寺薬師寺堂　西神村		渦の絵様が、虹梁の場合と同様に、彫りが浅く幅が狭いものから彫りが深く幅が広いものへと変化し、渦の形状は円形から楕円状へと変わる。
1639年 (寛永16年)	 香取神社本殿　庄和町	近世初期は袖切のみ、あるいは袖切に何らかの絵様を施す程度。 寛永から宝永ごろの絵様は、渦・若葉の紋様がともに単純である。 彫りは浅いものから深いものへ、幅は狭いものから広いものへと次第に変化する。	
1624～1658年 (寛永～明暦)	 氷川神社摂社八坂神社　川越市		江戸時代初期の様相
1667年 (寛文7年)	 氷川女体神社本殿　浦和市宮本		
1671年 (寛文11年)	 高城神社本殿　熊谷市		
1695年 (元禄8年)	 慈光寺釈迦堂　都幾川村		
1709年 (宝永6年)	 氷川神社本殿　与野市		彫りが深く、幅も広くなってきた段階。
1722年 (享保7年)	 古尾谷八幡神社本殿　川越市	変化が顕著になる。 袖切上端部から斜めにくだる曲線部にひれ状の突起が生じ、また、渦の中心部が楕円状の玉子のような形のふくらみを持つようになるのが享保期の特色である。	渦が楕円形であることを超えてすでに渦とは言い難い形となり、動物の顔のような形となる。
1724年 (享保9年)	 金鶏神社本殿　本庄市		

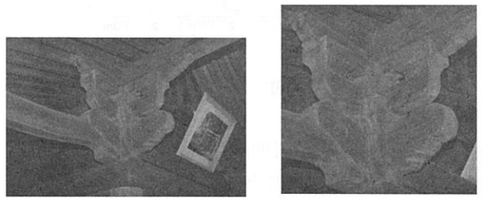


写真5　太田諏訪神社　絵様(木鼻)

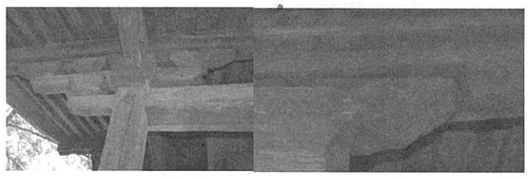
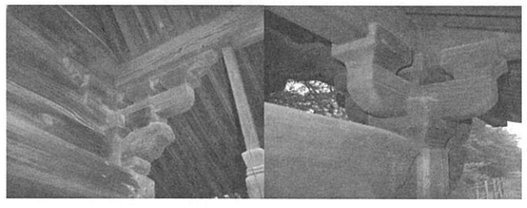


写真6　長宮香取神社　絵様(実肘木)



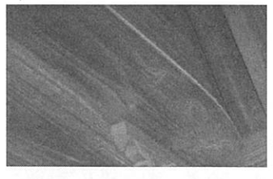


写真7　明戸天満宮絵様
左上：木鼻
右上：水引虹梁
左下：妻面虹梁

5.1　太田諏訪神社

中備の蟇股は、旧来のものは失われており、雲状の蟇股が取り付けられている。木鼻には絵様繰型があり、禅宗様となっている。渦の彫りは浅く、幅は狭い。

5.2　長宮香取神社

桁行方向の実肘木には絵様繰型がある。絵様は彫りの浅い渦巻である。

5.3　明戸天満宮

中備の蟇股は、中の彫刻が失われている。木鼻には絵様繰型がついている。水引虹梁には渦が、妻面の虹梁には渦と若葉が彫られている。

5.4　絵様による比較・分析・考察

太田諏訪神社については、木鼻に絵様繰型がつけられている。絵様については、彫りの形や深さなどから年代判定を行うが、太田諏訪神社については、17世紀前半のものであるといえる。長宮香取神社については、実肘木に絵様繰型があり、彫りは浅い渦巻きである。このことから、絵様としては、江戸時代前期、17世紀前半の建立と見られる。明戸天満宮については、木鼻の絵様繰型、水引虹梁には渦、妻面の虹梁には渦と若葉が彫られている。17世紀半ばの建立と考えられる。

6.　匠明による比較・分析・考察

実測データを基に『匠明』との比較を行う。匠明とは、江戸幕府作事方大棟梁である平内家に伝来した木割書であり、1608年(慶長13)に成立したものである。同時期の建築に比べ、木太に書かれている。

表3に示すように太田諏訪神社、明戸天満宮については、匠明の木割より細く作られていることがわかる。また、長宮香取神社については、匠明より太く作られている。しかし、大斗、巻斗、肘木など組み物の大きさは両者ともほぼ匠明に近い。匠明の柱が木太に設定されていることを考慮すると、匠明より柱の細い、太田諏訪神社、明戸天満宮については匠明と同時期に作られたものと考えられる。長宮香取神社については、造りが特殊なため建立年代の断定は難しい。しかし、匠明より太く作られていることから、向拝部分のみ後から取り付けられた可能性も考えられる。

表3　匠明による木割比較

名称	「匠明」社記集一間社流造		実測値			実測値			「匠明」社記集二間社流造		実測値		
	木割	寸法(枝)	太田諏訪神社(mm)	(枝)	匠明との差(枝)	明戸天満宮(mm)	(枝)	匠明との差(枝)	木割	寸法(枝)	長宮香取神社(mm)	(枝)	匠明との差(枝)
正面柱間	L	22	1230	16.00	−6.00	1005	17.00	−5.00		28	1310	28.00	0.00
側面柱間		20	1080		−20.00	890	15.05	−4.95	L	18	1705	36.44	18.44
身舎柱太さ	a1=0.1L	2.2	120	1.56	−0.64	105	1.78	−0.42	a1=0.1L	1.8	190	4.06	2.26
内法長押高さ	0.6L	13.2	767	9.98	−3.22	750	12.69	−0.51	0.6L	10.8	1225	26.18	15.38
内法長押成	0.6a1	1.32	90	1.17	−0.15	70	1.18	−0.14	0.6a1	1.08	112	2.39	1.31
長押のくび	0.2a1	0.44	33	0.43	−0.01	20	0.34	−0.10	0.2a1	0.36	40	0.85	0.49
頭貫成	0.7a1	1.54	97	1.26	−0.28	90	1.52	−0.02	0.7a1	1.26	85	1.82	0.56
頭貫幅	0.3a1	0.66	20	0.26	−0.40	55	0.93	0.27	0.3a1	0.54	65	1.39	0.85
向拝柱太さ	a2=0.8a1	1.76	93	1.21	−0.55	80	1.35	−0.41	a2=0.8a1	1.44	102	2.18	0.74
切目長押成	0.6a1	1.32	70	0.91	−0.41	70	1.18	−0.14	0.6a1	1.08	210	4.49	3.41
縁板厚さ			53	0.69	0.69	25	0.42	0.42			44	0.94	0.94
大斗幅	a1	2.2	220	2.86	0.66	110	1.86	−0.34	a1	1.8	210	4.49	2.69
大斗成	0.6a1	1.32	78	1.01	−0.31	30	0.51	−0.81	0.6a1	1.08	130	2.78	1.70
斗尻	0.6a1	1.32	176	2.29	0.97	65	1.10	−0.22	0.6a1	1.08	140	2.99	1.91
大斗繰	0.6a1×2/5	0.528	27	0.35	−0.18	65	1.10	0.57	0.6a1×2/5	0.432	45	0.96	0.53
肘木幅	1/3a1	0.733	46	0.60	−0.13	45	0.76	0.03	1/3a1	0.6	65	1.39	0.79
肘木成	1/3a1×1.2	0.88	57	0.74	−0.14	50	0.85	−0.03	1/3a1×1.2	0.72	85	1.82	1.10
巻斗長さ		1.44	104	1.35	−0.09					1.44	100	2.14	0.70
巻斗成	1.3a1×1.2	0.88	72	0.94	0.06	50	0.85	−0.03	1.3a1×1.2	2.808	95	2.03	−0.78
巻斗斗尻	長さの3/5	0.864	67	0.87	0.01				長さの3/5	0.864	65	1.39	0.53
巻斗繰	成の2/5	0.352	32	0.42	0.06	20	0.34	−0.01	成の2/5	1.1232	30	0.64	−0.48
巻斗木口	1/9a1	0.244	19	0.25	0.00	15	0.25	0.01	1/9a1	0.2	20	0.43	0.23
実肘木長さ		1	135	1.76	0.76	50	0.85	−0.15		1	95	2.03	1.03
丸桁成	0.6a1	1.32	75	0.98	−0.34	95	1.61	0.29					
丸桁幅		1	76	0.99	−0.01	60	1.01	0.01					

7.　岩槻の都市形成史との関係

太田諏訪神社付近は、江戸時代に岩槻城の武家地内の「諏訪小路」とよばれる一画にあたり街路や街区名の諏訪小路は当社に因むと考えられる。

図5　岩槻城城下町地図(1682年)

図5に示したように阿部氏在城当時の絵図には、現在太田諏訪神社がある場所に「諏訪宮」と記載がある。この記載からも太田諏訪神社が1682年以前に創立していたことがわかる。また岩槻城の北に鎮座する久伊豆神社は江戸の鬼門除けとして創建されたとされており、太田諏訪神社も同様に鬼門除けとされたと考えられる。

8.　三神社における建立年代の推定

実測データに基づき、各神社の絵様、木割を比較した。太田諏訪神社については建築年代を明示する資料は現時点では発見されていない。しかし、絵様、細部の形状などから17世紀前半の建築である可能性が高く、匠明との比較においても匠明の成立と同時期と考えられるため、17世紀前半に建立されたと考えられる。これは当神社を勧請したと伝えられる城主阿部正次在城期(1623～38年)と重なる。

長宮香取神社については、1474年(文明6年)銘の鰐口があることから、創立は中世後期までさかのぼることがわかる。しかし、実測データによる絵様や、細部の形状から17世紀の前半の建築とみられるが、なぎなた型の木鼻をはじめ造りが特殊なことや、匠明の比較により同時期の建築に比べ木太であることなどから、建立年代を断定することは難しい。

明戸天満宮については、絵様などから17世紀半ばの建築と考えられる。匠明との比較においても同時期のものと考えられる。

9.　まとめ

さいたま市岩槻区(旧岩槻市)は、岩槻城が長禄元年(1457年)太田氏によって築城され、近世初頭に戦乱で荒れた街並みの復興に力が注がれ、城下町として発展を続けてきたが、江戸時代にさかのぼる遺構は数が乏しい。

実測データから長宮香取神社については建立年代明らかにならなかったが、太田諏訪神社については17世紀前半、明戸天満宮については17世紀半ばの遺構であると考えられる。

長宮香取神社についても、鰐口にあるように中世以来の神社本殿の建築として貴重なものであるといえる。

以上を踏まえ、さいたま市域における宗教建築のあり方を考える上で大きな意味を持つものであり歴史的に十分価値のあるものであるといえる。

参考文献

1)「岩槻市史」岩槻市長　関根龍之悉　1985年
2)「岩槻市史年表改訂版」岩槻市教育委員会市史編さん室　1980年
3)「『さいたま市博物館研究紀要』」第五集　抜刷」青木義脩　野尻靖　2006年3月
4)「関東地方の近世社寺建築〈2〉」伊藤甫律　2003年
5)「匠明」伊藤要太郎　1992年